

1章 イスラーム世界の成立

問題

【1】

解答

- A イ ペルシア ロ ヒジュラ（聖遷） ハ ウマル ニ ワリード1世
ホ コルドバ ヘ ウラマー ト マンスール チ 駅伝
- B あ c い a う h え d お f か i
- C 1 ビザンツ帝国とササン朝が抗争していたため。
2 d 3 カール＝マルテル

解説

ムハンマドによるイスラーム教団の創設から、ウマイヤ朝を経てアッバース朝時代までが主題となっているイスラーム史。アラビア語の名称はなじみにくいかもしいが、しっかりと確認しておきたい。

- A イ アラビア半島は、ペルシア湾、紅海、インド洋に囲まれているが、「湾」とつくのはペルシア湾しかない。
- ロ 基本的事項。622年の出来事である。
- ハ ムハンマドの死後、その後継者としてカリフが選出された。ムハンマドの義父のアブー＝バクルを初代カリフとする正統カリフは、第4代のアリーまで続いた。第2代カリフのウマルの時代、ビザンツ帝国からイラク・シリア・エジプトを奪い、イスラーム世界は一気に拡大した。
- ニ やや難。ウマイヤ朝の最盛期は8世紀初頭で、具体的には、アブド＝アルマリク（位685～705）、およびワリード1世（位705～15）の時代なのだが、ここでは問題文に「第6代カリフ」とあるのでワリード1世が正解となる。
- ホ 後ウマイヤ朝の首都だからコルドバが正解。
- ヘ やや難。ウラマーと呼ばれる「イスラームの宗教的知識人」が神学・法学上の問題を研究・伝承し、実生活に役立てた。
- ト アッバース朝のカリフでは、最盛期を現出した第5代カリフのハールーン＝アッラシードが頻出だから、この問題はやや難といえる。第2代カリフのマンスールは762年にティグリス川中流の河畔に円形都市バグダードを建設し、アッバース朝の首都とした。
- チ やや細かい。しかし「バリード」という言葉を知らなくても、「広大な帝国のさまざまな情報をカリフのもとにもたらし」という部分から「駅伝」制度を類推できるだろう。カリフは首都バグダードにいながら、帝国全土の情報を押さえていた。
- B あ イスラーム史では意外に出題されやすい用語である。聖遷ののちにメディナで成立した信徒の共同体がウンマである。選択肢の中で紛らわしい用語もないので、消去法で見つかったのではないだろうか。

い 「現金俸給」をアターと呼ぶ。アラビア語はなじみにくいものだが、これを機会に覚えてしまおう。現金で俸給を支払う制度をアター制と呼ぶが、このアター制からイクター制への変更については、しっかりと理解しておくこと。

う～お 同じ異民族でも、イスラーム教に改宗しなかったジンミーと、イスラーム教に改宗したマワーリーの区別をしっかりとおさえておくこと。また人頭税をさすジズヤ、地租をさすハラージュもしっかりと覚えておきたい。

か この官職が「官僚制を統括」する地位にあるということで、宰相を意味するワズィールが正解。選択肢の中で、他に官職に該当する名称もない。

C 1 ムハンマドがイスラーム教を創始した7世紀という時代の西アジア地域を思い浮かべよう。それ以前に盛んに行われていたペルシア湾を通る交易ルートは、西のビザンツ帝国と東のササン朝との対立・抗争で衰退していた。それに代わって活況を呈していたのが、紅海沿いのアラビア半島での陸上交易ルートである。

2 ウマイヤ朝の創始者ムアーウィヤはシリア総督であったから、自らの勢力基盤であるシリアのダマスカスを都とした。

3 中世西欧史の基本的事項。トゥール・ボワティエ間の戦いでのフランク王国メロヴィング朝の宮宰カール＝マルテル（カロリング家）の活躍が、やがて教皇とのちに成立するカロリング朝の接近を促していく。

【2】

解答

設問1 ④ 設問2 ④ 設問3 ② 設問4 ④ 設問5 ④

解説

イスラームの成立期を題材とした正誤判定問題。選択肢の誤りは分かりやすいので、全問正解をめざしたい。

設問1 ④が誤り。ムハンマド（570頃～632）を生んだハーシム家はメッカにおいてウマイヤ家に次ぐ有力家系であり、クライシュ族の氏族の1つであった。よって、ハーシム家がメッカの支配権から疎外されていたという事実はない。

設問2 ④が誤り。751年にタラス河畔で唐軍と戦ったイスラーム勢力はウマイヤ朝（661～750）でなくアッバース朝（750～1258）である。

設問3 ②が誤り。ジズヤとハラージュの課税対象者の推移は対照的である。ジズヤは初め啓典の民に対して課せられたが、正統カリフ時代以後、すべての征服地の異教徒に対して課税されるようになった。一方、ハラージュは最初征服民に課せられていたが、アッバース朝以後は、征服地の土地所有者であればアラブ人ムスリムに対しても課税されるようになった。

設問4 ④が誤り。ハーシム家の一族に当たるアッバース家のアブー＝アルアッバースは、シーア派や非アラブ人改宗者の不満を巧みに利用してアッバース朝を建国した。しかし王朝の成立後はシーア派を弾圧した。

設問5 ④が誤り。パンノニアを故地とし、北イタリアに建国したランゴバルド王国（568～774）は、同じゲルマン人のフランク王国（カロリング朝）により滅ぼされた。

【3】

解答

問1 (1) 正統カリフ時代 (2) クライシュ族 (3) シーア派

問2 (1) a (2) ア d イ d (3) c (4) d (5) c (6) ウマイヤ朝
(7) ア アラビア語 イ c 問3 ① オ ② ウ ③ カ

解説

7～8世紀のイスラーム世界に関する問題。いずれも基礎～標準レベルの問題なので、確実に正解したい。問3の地図問題が解けなかった方は、もう一度資料集などで主要都市の位置をよく確認しておくこと。

問1・問2-(6) ムハンマドの死後、選挙制で選ばれた4人のカリフが統治した時代を正統カリフ時代という。当時のメッカの支配部族はクライシュ族といい、なかでもハーシム家とウマイヤ家が有力であった。4代目の正統カリフであるアリーがハワーリジュ派に暗殺された後、シリア総督ムアウィヤがカリフを称してウマイヤ朝を創始した。アリーとその子孫のみをムハンマドの正統な後継者と認める人々はシーア派を形成し、代々のカリフを正統と認めるスンナ派としばしば対立した。

問2 (1) 初期イスラーム世界では、征服地から取り立てた租税をもとに、軍人・官僚に現金で俸給を支払った。この俸給をアターという。9世紀半ば以降にはアター制は衰え、アターの額に見合う金額を徴収できる土地の管理と徴税権を与えるイクター制へと移行していった。

(2) 750年にアッバース家のアブー＝アルアッバースによってアッバース朝が開かれ、762年には第2代カリフのマンスールによってティグリス川中流に新都バグダードが造営された。第5代カリフのハールーン＝アッラシードの下でイスラーム文化が栄え、8世紀後半～9世紀初頭に全盛期を迎えたが、1258年にモンゴル帝国のフラグの西征で滅亡した。

(3) ササン朝で国教とされたのはゾロアスター教である。中国では祆教けんきょうと呼ばれた。なお、aの回教はイスラーム教の、bの景教はネストリウス派キリスト教の中国名である。

(4) 726年に聖像禁止令を発したビザンツ皇帝はレオン3世である。ローマ教会はゲルマン人への布教に当たり聖像を用いていたためこの禁止令に反発し、東西教会の対立が深まった。

(5) イスラーム勢力が征服地の拠点とした軍営都市をミスルといい、代表的なものにイラクのクーファやバスラ、エジプトのフスタートなどが挙げられる。なお、aのスークはアラビア語で市場のこと、bのマドラサは高等教育機関、dのモスクはイスラーム教の礼拝堂である。

(7) イスラーム教の聖典である『コーラン』はアラビア語で記録されている。ムハンマドの言行(スンナ)に関する伝承をまとめたハディースは、『コーラン』とともに重要視されている。なお、aのウンマはイスラーム教徒の共同体、bのヴェーダは古代インドの聖典、dのヒジュラは迫害を受けたムハンマドが622年にメッカからメディナへ逃れたことをさす。

問3 地図問題としては最も平易な部類に入る。誤った場合はすぐに確認しておきたい。

2章 イスラーム世界の発展

問題

【1】

解答

問1 1 アルタイ 2 ソグド人 3 カラ＝ハン 4 マリク＝シャー

問2 b 問3 c 問4 b 問5 d 問6 b

解説

トルコ民族に関するテーマ史。前半部分ではイスラーム史以外の範囲からも出題されているが、ここでまとめて整理しておこう。

問1 1 やや難しいが知っておきたい。トルコ民族の原住地で「天山の北方」がヒントとなる。

2 この部分の時代設定は6世紀半ばから9世紀の間となっている。この頃に、イラン系の商業民族で、中央アジアを中心に東西貿易で活躍したのはソグド人である。この民族名は東西交渉史でよく問われるので注意しておこう。

3 中央アジアに建国された初のイスラーム王朝はサフアール朝（867～903）であるが、9世紀の建国である上、これはイラン系の王朝なので、問題文の「10世紀に…成立」「中央アジア史はトルコ＝イスラーム時代を迎える」という記述にそぐわない。よって中央アジア初のトルコ系イスラーム王朝ということで、カラ＝ハン朝（10世紀中頃～12世紀中頃）が正解となる。ここから中央アジアのトルコ民族の間にイスラーム教が広まり、中央アジアのトルキスタンはイスラーム化していった。

4 やや難。11世紀後半にセルジューク朝の最盛期を現出した第3代スルタン、マリク＝シャーの業績については、宰相ニザーム＝アルムルクの登用と、彼によるニザーミーヤ学院の開設を押さえておきたい。

問2 ササン朝を中興した王ホスロー1世（位531～79）が正解。

問3 ブルガール人はアジア系遊牧民で、バルカン半島東南部で7世紀末に建国した。セルビア人は南スラヴ系で、6世紀にバルカン南西部に入り、11世紀中頃にはセルビア王国を建国した。チェック人は西スラヴ系で、10世紀には現在のチェコの中心部に当たる地域にベーメン王国を建国した。ゲルマン人はインド＝ヨーロッパ語系の民族で、4世紀後半以降ヨーロッパ西南部へ移動し、各地で建国した。

問4 やや難。9世紀中頃にイラクのバスラ周辺で起こったザンジュの乱が正解。ザンジュとはアフリカから送られてきた黒人奴隷のことをさす。イラン人のアリー＝ブン＝ムハマドがザンジュを巻き込んで反乱を起し、政府軍を破って南イラク一帯を占領したが、883年に鎮圧された。この反乱はアッバース朝の国家体制を動揺させる事件となった。その他の選択肢については、aのマフディーの反乱は19世紀後半のスーダンで起こった反英民族運動。cのバンバタの反乱は1906～07年に南アフリカのズールーランドで起こった反英民族運動

であるが、入試にはほとんど出ない。dのウラービーの反乱はエジプトで1881～82年に発生した、エジプト民族運動の先駆けとなった反乱である。

問5 中央アジア一帯を999年まで支配していたサーマーン朝が正解。アム＝ダリヤとはアム川のことをさす。資料集の地図でサーマーン朝の支配領域を確認しておこう。

問6 11世紀に活躍した詩人で「ジャラリ暦の制定にも参加」という部分から、『ルバイヤート』で有名なウマル＝ハイヤームが正解となる。

【2】

解答

問1 地中海 問2 製紙法 問3 ムラービト朝・ムワッヒド朝

問4 イブン＝ルシュド（アヴェロエス） 問5 アルハンブラ宮殿

問6 ジズヤ（人頭税）・ハラージュ（地租） 問7 ③ 問8 ② 問9 啓典の民

問10 スーフイズム（スーフイー信仰）

解説

西ヨーロッパ世界とイスラーム世界との交渉史。問題文をよく読んで、両世界間の政治・文化の交流について理解を深めよう。なお、問われている内容はどれも基本的なものである。

問1 問題文の「7世紀以降のイスラーム勢力の西方への拡大」がどのようなものであったか、実際に歴史地図で確認してみよう。すると8世紀以降、イベリア半島からシリアに至るまでの地中海沿岸はイスラーム諸王朝の支配下に入っていることが分かる。よって問題文にある「イスラームの海」とは地中海のこととなる。

問2 タラス河畔の戦い（751）は製紙法が西伝した戦いとして東西交渉史上重要であり、頻出事項でもある。唐の武将は高仙芝、イスラーム側はアッバース朝の軍隊であった。

問3 基本問題。ベルベル人がアフリカのイスラーム化に果たした役割を再認識しておくこと。

問4 「12世紀」「アリストテレス研究」の「哲学者」「コルドバ生まれ」のキーワードから、正解のイブン＝ルシュドを導き出せる。ラテン名のアヴェロエスも別解となる。哲学者のイブン＝ルシュド、そして医学者・哲学者のイブン＝シーナー（中央アジアのブハラ出身、ラテン名アヴィケンナ）の2者に関する出題パターンとしては、アヴェロエスやアヴィケンナといったラテン名が提示され、「この人物のアラビア名は何か」といった形式で問われる場合も多い。したがって、アラビア名・ラテン名を双方とも覚えておく必要がある。

問5 ナスル朝に関しては、「イベリア半島最後のイスラーム王朝」「都はグラナダ」「アルハンブラ宮殿の建設」の3ポイントをセットで覚えておこう。

問6 超基本事項。ウマイヤ朝が課したこの2つの租税に対する改宗者（マワーリー）の不満がアッバース革命を引き起こした原動力の1つでもあった。

問7 正誤問題では、消去法の活用が有効である。①の「農民が国家から直接」土地を借り受ける制度は中国の均田制の説明であり、イクター制には当てはまらない。また、イクター制はプワイフ朝に始まり、セルジューク朝、マムルーク朝、オスマン帝国の時代に発展した制度なので、②も誤りである。また④の「軍人は直接国庫から現金で俸給の支払いを受けた」とはイクター制以前のアター制の特徴なので、これも当てはまらない。よって③が正解。イ

クターとは「(土地や権利を) 切りとって与えること」を意味する言葉で、イクター制は、土地から徴収した税を国家が官僚・軍人に再分配するシステムが機能しなくなったために考え出された制度である。本来は徴税の権利のみ与えられたのだが、次第に軍人が土地を支配する体制へと変化していった。

問8 これも問7と同じ消去法で考えてみよう。ムムルークは異民族出身の奴隷兵であるが、①のように「奴隷に似た、家畜同然に扱われた下層民」ではなかったのが誤り。また「トゥグリル＝ベク」はセルジューク朝の始祖であり、ムムルーク朝の始祖ではないので、③も誤りとなる。次に④であるが、確かにインド最初のイスラーム王朝は13世紀初頭に成立した奴隷王朝であるが、これは多くのスルタンや有力者が宮廷奴隷出身であったことに由来する名称であり④のような事実はないのでこれも誤りとなる。よって②が正解となる。

問9 ムハンマドがユダヤ教・キリスト教の預言者を自分に先立つ存在として認めたことが、問題文にあるような特別待遇の根拠となった。頻出事項なのでしっかりと覚えておくように。

問10 スーフィズムはよく出題される事項である。その時代(10世紀頃)、広まった階層(農民、都市民、商人)、信仰の特色(精神的な神との合一を求める・神秘主義的傾向が強い)などをよく把握しておこう。

[3]

解答

- ① クライシュ ② 預言者 ③ 750 ④ コルドバ ⑤ ジハード(聖戦)
⑥ メロヴィング ⑦ アミール ⑧ ブワイフ ⑨ セルジューク

解説

13世紀頃までに各地で成立したイスラーム王朝について概観した問題。基本的な問題が多いので、間違えた問題があれば念入りに復習しておこう。

- ① アラビア半島の貿易ルートはメッカを拠点にしていた。この地で遠隔地貿易を支配していたアラブ人の部族はクライシュ族である。彼らは半島南部の都市アデンに集まるインドや中国の物産をシリア方面へ隊商交易で運び、黒海やエジプトの物産と交換して巨富を得ていた。またクライシュ族は、古くからメッカにあるカーバ神殿の管理権を掌握して勢力を誇っていた。
- ② メッカ郊外のヒラー山中で610年頃に唯一神アッラーの啓示を受けたムハンマドは、自らを預言者と信じた。『コーラン』では彼を、アダム・ノア・アブラハム・モーセ・イエスなどに続く“最後にして最大の預言者”と位置付けている。ムハンマドはユダヤ教やキリスト教の啓典を否定せず、その信徒を“啓典の民”として寛大に扱った。
- ③ ウマイヤ朝はシリアのダマスクスに都を置いて四方に領土を拡大したものの、民衆の不満が増大し、その結果、反ウマイヤ朝勢力がムハンマドの血統を引くアブー＝アルアッバース(位750～54)を擁立して750年にアッバース朝を開いた。第2代カリフのマンスール(位754～75)は762年、新都バグダードの建設に着手した。
- ④ アッバース朝成立の際にウマイヤ家の一族がイベリア半島に逃れ、アンダルシア地方のコルドバを都に後ウマイヤ朝を建てた。同朝はピレネー山脈を越えてヨーロッパへ進出するこ

とはできなかったものの、ノルマン人の侵入を防いでイベリア半島に西方イスラーム文化の花を咲かせることとなった。

- ⑤ イスラーム教徒が行った征服活動はジハード（聖戦）と称される。信者にとってこれに参加することは信仰の証であり、戦利品は平等に分配された。ジハードは目覚しい成果をあげ、例えば第2代正統カリフのウマル（位 634～44）率いるアラブ軍は642年、ニハーヴァンドの戦いでササン朝を破り、これを崩壊に導いた。
- ⑥ 661年に成立したウマイヤ朝は西欧への進出も行い、711年にイベリア半島の西ゴート王国を征服し、次いでフランク王国メロヴィング朝と対峙した。しかし732年、トゥール・ポワティエ間の戦いでメロヴィング朝の宮宰カール＝マルテルに敗北した。
- ⑦ アッバース朝は、北アフリカ・アラビア半島・シリア・イランから中央アジア・インダス川流域に及ぶ広大な領域を支配したが、これらの統治を円滑に行うため、征服地にアミールと称する総督を設置した。彼らは各々の地域を征服した将軍であった。
- ⑧ 当初アラブ人を主体に発展したイスラーム国家は、やがてイラン系とトルコ系諸部族に引き継がれた。そのうち、10世紀前半にカスピ海南方の山岳地帯に成立した王朝はプワイフ朝である。支配層がシーア派を奉じたこの王朝は、トルコ系のセルジューク朝に滅ぼされるまでカリフを傀儡化して政治の実権を握った。
- ⑨ トルコ系部族を率いたトゥグルル＝ベクは、1038年にセルジューク朝を建国し、55年にバグダードに入城してシーア派のプワイフ朝を現地から追いやった。これにより、スンナ派の長であるアッバース朝のカリフから“スルタン”の称号を受け、イスラーム世界の世俗君主として西アジア一帯を支配した。

【4】

解答

- 問1 1 d 2 b 3 c 4 b 5 a 6 b 7 c 8 d
9 b
問2 c 問3 e 問4 (1) d (2) e (3) e

解説

シーア派イスラーム王朝を中心とした出題。やや踏み込んだ内容も問われているが、難関私大志望者であれば確実に正解したいレベルの問題である。空欄1・4のような基本的な年代を答える問題でも、年代を覚える習慣を普段からつけていないと失点してしまい、差をつけられる要因になりやすい。重要な事件については、年代もセットで覚えるようにしておくとういだろう。

- 問1 1・2. ムハンマドが632年に病没した後、イスラーム教徒は選挙によってカリフ（後継者）を選ぶこととした。こうして選ばれた最初の4代のカリフを正統カリフと呼び、初代カリフにはムハンマドの義父であるアブー＝バクルが選出された。
- 3・4 第4代カリフであるアリーが暗殺されると、シリア総督ムアーウィヤがカリフとなり、以後のカリフ位がウマイヤ家によって世襲され、ウマイヤ朝が開かれた。ウマイヤ朝ではアラブ人にのみ特権が認められたため、イスラーム教に改宗した被征服民の間で不満が高まった。

こうした不満やシーア派勢力を取り込んでアッバース家がウマイヤ朝を倒し、750年にアッバース朝を開いた。

5・6 シーア派は、イスマーイル派のような過激派や、十二イマーム派のような穏健派などに分かれた。イスマーイル派はファーティマ朝などで、十二イマーム派はブワイフ朝やサファヴィー朝などで信仰された。

7 ファーティマ朝はチュニジアに建国された王朝で、当初よりカリフを称してアッバース朝や後ウマイヤ朝と対立した。

8 ブワイフ朝はイラン系の軍事政権で、946年にバグダードに入り、アッバース朝カリフから大アミールに任ぜられたことで、イスラーム世界の軍事指導権・統治権を得た。

9 イル＝ハン国はフラグがイランを中心として建国したモンゴル人の王朝である。第7代ガザン＝ハンの時代にイスラーム教を国教としたが、14世紀半ばに解体した。

問2 第4代正統カリフであるアリーに不満を抱く一派をハワーリジュ派と呼ぶ。シリア総督ムアウイヤと対立する中で妥協的な態度をとったとしてアリーを批判し、暗殺した。

問3 イスラーム教の成立・拡大過程で、アラブ人イスラーム教徒は征服地の重要拠点に移住し、ミスルと呼ばれる軍営都市を建設した。代表的なものとして、エジプトのカイロ付近に位置するフスタート、イラクのバスラやクーファ、チュニジアのカイラワーンなどがある。

問4 (1)・(2) ニザーム＝アルムルクはイクター制や軍事制度などを整備するとともに、ニザーミーヤ学院を開設して学芸を奨励するなど、セルジューク朝の繁栄に努めたが、イスマーイル派の一派によって暗殺された。著書『統治の書』では、スルタンがどのような統治を行うべきかについて述べている。

(3) 1071年のマンジケルトの戦いにおいて、セルジューク朝がビザンツ帝国を破ったことが、トルコ人による小アジア征服の始まりとなった。

3章 インド・東南アジア・アフリカのイスラーム化

問題

【1】

解答

- 設問1 (1) ③ (2) ② (3) ⑤ (4) ③ (5) ① (6) ⑤ (7) ② (8) ①
(9) ⑤ (10) ①
設問2 ② 設問3 ③ 設問4 ⑤

解説

東南アジア史の概観問題。東南アジアは国も多く、各国の王朝の特色なドイスラーム世界と同じように手間がかかるが、出題内容はある程度限定される。多くの問題を解き、知識を定着させよう。設問1-(3)・(8)は難問であるが、他は東南アジアでは頻出。設問3・4もアンコール=ワット・ボロブドゥール関係は頻出。ある程度の知識があれば消去法でも解答できる。

- 設問1 (1) 扶南の外港遺跡オケオからはローマ金貨、漢の銅鏡などが出土している。ローマとは直接ではなくインドのサータヴァーハナ朝やクシャーナ朝を通しての間接的な貿易であったらしい。
- (2) 扶南についてはマレー=ポリネシア語系のマレー人の建国か、クメール人の建国か、曖昧なところがあるが、カンボジア(真臘、クメール)(6~15世紀)はクメール(カンボジア)人による建国。
- (3) 難問。9世紀頃モン人が建国した港市国家はペゲー。①のジョホール王国(1530頃~1718)はマラッカ王家がマレー半島南端に建国した港市国家。②のフエ(ユエ)は阮朝越南国の都があったヴェトナム中部の都市。③のピュー(驃)はチベット=ミャンマー(ビルマ)系民族南下の先駆でイラワディ川流域に建国された国家。仏教が栄えたが、南詔国(雲南のチベット=ビルマ系のロロ族の国家; ?~902)の攻撃で衰退し、タイのパガン朝に吸収されたらしい。④のゴアはインド西岸の港市。1510年にポルトガルが占領し、アジア進出の根拠地とした。
- (4) 頻出。
- (5) 唐代には室利仏逝、宋代には三仏斉と記述されている。
- (6) シュリーヴィジャヤ王国は、南インドのチョーラ朝(前3~後13世紀)の攻撃を受け、ジャワ島のマジャパヒト王国(1293~1520頃)が海上に進出すると衰退した。④のクディリ王国(928~1222)は、ジャワ島のヒンドゥー教国家で、インドの『マハーバーラタ』のジャワ語翻訳や影絵芝居(ワヤン)が行われたことでも有名。
- (7) スマトラ島北端のイスラーム国家はアチェ王国。①のクシュ王国はナイル川上流の最古の黒人王国、ナイル川上流からエジプトに侵入したがアッシリアに征服され、メロエへ拠点を移した。③のバンテン王国(1527頃~1813)はジャワ島西部のイスラーム王国。ラオスの統一王国だったランサン王国(1353~1707)が、ヴェトナム・タイ・ビルマの圧迫で3勢

方に分立したうちの1つが④のルアンプラバン王国である。

- (8) やや難問。ジャワ島であるから③のラオスの統一王国であるランサン王国は消去できる。これで①・②・④・⑤に絞られる。①のバンテン王国は(7)参照。②のマタラム王国は16世紀末にマジヤパヒト王国に代わってジャワ島の東部に成立した。⑤のシンガサリ朝(1222～92)はジャワ島のヒンドゥー教国家で、フビライ＝ハンの使節を追放した結果、元軍の遠征を受け滅亡した。④のマジヤパヒト王国はジャワ島最後のヒンドゥー教国家で、元の遠征でシンガサリ王国が滅びると、元軍を利用して敵対勢力を駆逐し、その後元軍を撃退した。農業国家で、米輸出などの海上貿易で栄えた。
- (9) ラームカムヘーン王はスコタイ朝全盛期の王で、クメール文字をもとにタイ文字を作成した。元に朝貢し、支配領域は現在のカンボジアからマレー半島にまで及んだ。スコタイ朝はその後タイ中部のアユタヤ朝に吸収され滅亡した。①のネ＝ウインはビルマの軍人・政治家で、1962年以降政権を握り、社会主義を推進した。②のアラウンパヤーはミャンマー最後の統一王朝コンバウン朝(アラウンパヤー朝；1752～1885)の建国者。③のパオ＝ダイは阮朝越南国最後の王で、第二次世界大戦後にフランスがヴェトナム民主共和国(北ヴェトナム)に対抗して建国したヴェトナム国(南ヴェトナム)の国家主席に擁立された。④のシハヌークはカンボジアの王族出身の政治家で、王国としてフランスから独立(1953)した時に国家元首となり、王政社会主義を推進した。
- (10) ④のラーマ4世(位1851～68)はイギリスと初めて不平等なボーリング条約(1855)を締結し、自由貿易を許可した。⑤のラーマ5世(チュラロンコン；位1868～1910)は対仏条約でカンボジアに対する宗主権を、対英条約でマライ半島の旧属領に対する宗主権を、それぞれ放棄することで独立を守った。

設問2 チャンパーの表記は林邑→環王(8世紀)→占城と変化した。①の胡朝は陳朝大越国滅亡後の短期王朝(1400～07)。③の大越国はヴェトナムの李朝(1009～1225)・陳朝(1225～1400)・黎朝(1428～1527, 1532～1789)・西山朝(1778～1802)で使用された国号。④の昇竜は李朝大越国時代のハノイの表記で、黎朝では東京と表記された。⑤の驃(ピュー)は設問1-(3)を参照のこと。

設問3 アンコール＝ワットはスールヤヴァルマン2世(位1113～52頃)が建設。ジャヤヴァルマン7世(位1181～1220頃)は現存するアンコール＝トム(王都、大きな都の意味)を造営した王。

設問4 プランバナン寺院群はジャワ島中部に建国された古マタラム国が建設したヒンドゥー教寺院群。シャイレンドラ朝はジャワ島を中心にスマトラ島も支配した水稻耕作を基盤とする農業国家。大乘仏教が盛んで、グプタ様式の影響を受けたボロブドゥール(大ストゥーパ)を建設した。

【2】

解答

1 L 2 B 3 K 4 H 5 F

設問1 C 設問2 B 設問3 B 設問4 C 設問5 A

解説

問題文はアフリカのイスラーム化および黒人王国について述べたものであるが、設問は総合問題の色彩が濃い。問題文自体をよく読んで、その理解に努めること。

- 1・2 イスラーム世界の拡大の様子は歴史地図で確認しておくこと。1は正統カリフ時代、2はウマイヤ朝時代となる。なお、ウマイヤ朝が北アフリカの地中海沿岸全域を支配下に入れたため、地中海が“イスラームの海”と呼ばれるようになった。
- 3 750年のアッバース革命に至る背景を押さえておくこと。アッバース朝は主にイラン系のマワーリーの協力を得てアッバース朝を創始し、以後彼らを重用している。
- 4 ベルベル人の王朝はムラービト朝とムワッヒド朝とあるが、ムワッヒド朝の成立は12世紀(1130)の出来事なので、ここではムラービト朝が正解となる。
- 5 15世紀の地中海のイスラーム王朝となると、マムルーク朝かオスマン帝国かで迷うが、「東地中海に進出」しつつあった勢力ということでオスマン帝国が正解となる。

設問1 基本問題。5世紀にカルタゴ地域で建国し、100年余りで滅んだゲルマン系の国で、選択肢にあるのはヴァンダル王国。因みにランゴバルド人は北イタリアに、西ゴート人はイベリア半島に、ブルグンド人はフランス東南部に最終的に定住した。ゲルマン人の大移動については、各部族がどのようなコースをたどり、最終的にどこに建国したのか、またその滅亡はどのような勢力によるのかをしっかりと確認しておく必要がある。混乱しないように注意したい。

設問2 正統カリフ時代のイスラーム勢力がエジプトを奪った相手を答えればよい。ビザンツ帝国はこの時代に、穀倉地帯であったシリアやエジプトを奪われた。

設問3 「8世紀以前から西アフリカのセネガル川上流において交易によって栄えた黒人王国」ということで、ガーナ王国が正解。「交易」という部分に着目するとよい。

設問4 ここで決め手となるのが「14世紀を頂点として黒人イスラーム王国が栄えた」という時代設定と、「イスラーム教に改宗した」という宗教的特色である。よって答えはマリ王国となる。この王国の最盛期を現出した王マンサ＝ムーサ(カンカン＝ムーサ；位1312～37)は覚えておくこと。

設問5 明の宦官でイスラーム教徒であった鄭和は永楽帝の命により、1405～33年にかけて7度に及ぶ南海遠征(7回目は宣徳帝の時代)を行い、アフリカ東岸マリンディにまで達していた。その他の選択肢についても有名な人物が多いので確認しておこう。Bの義浄は唐代にインドに赴いた仏僧で、著書に『南海寄帰内法伝』がある。Cの張騫は前漢の武帝の命により、中央アジアを経て大月氏国(ソグディアナ地方)に赴いた。この張騫の西域旅行により、中国人は西域に関する多くの知識を獲得した。Dの道安は五胡十六国時代の仏僧で、中国仏教教団の戒律のもとを定めた。大学受験においてはやや細かい人物ではある。

【3】

解答

- 1 クシュ 2 メロエ 3 アクスム 4 ムラービト 5 マラケシュ
6 ガーナ 7 マリ 8 トンブクトゥ 9 ソンガイ 10 ベニン

解説

古代から15世紀頃までにアフリカで勃興した諸王国を整理した問題。問題は基本的だが、アフリカは受験世界史において盲点になりやすい地域なので、今のうちから丁寧な学習を進めておきたい。

- クシュ王国（前920頃～後350頃）はエジプトの南方に成立し、ナイル川上流域のナパタを都とした。前8世紀にエジプトに侵入して第25王朝を築いたものの、前7世紀にアッシリア軍のエジプト侵入を受けて後退した。
- クシュ王国は前7世紀頃に都をメロエに移し、メロエ王国と呼ばれるようになった。交易路を押さえるなどして繁栄し、独自のメロエ文字（現在も未解読）を使用した。4世紀にアクスム王国（前2世紀頃／紀元前後頃～後6／9世紀）の侵入を受けて滅亡した。
- アクスム王国は、アラビア半島に居住していたアクスム人が、紅海を渡って現在のエチオピアに建てた国である。同国は4世紀以降、キリスト教化が進んだ。
- 4・5 マラケシュはモロッコ南西部の都市で、カサブランカの南方にある。ベルベル人による最初のマグリブ統一王国であるムラービト朝（1056～1147）の都として建設され、続くムワッヒド朝（1130～1269）の都としても栄えた。その後も王家の居住地となることが多く、マグリブ地方におけるイスラーム文化の中心地であり、またサハラ砂漠を縦断する隊商路の北の基点でもあった。
- ガーナ王国は、セネガル・ニジェール川流域に成立した黒人王国で、サハラ砂漠を縦断する交易で繁栄していたが、11世紀にムラービト朝の攻撃を受け、同世紀末には衰退した。
- 7～9 ガーナ王国に続いて、13世紀頃に成立したマリ王国（1240～1473）は、西アフリカ一帯を支配して金・岩塩の交易で繁栄した。その栄華はヨーロッパにも知られ、とくにトンブクトゥは経済やイスラーム教・学術の中心地であった。続くソンガイ王国（1464～1591）も広大な地域を支配したが、16世紀末にモロッコの侵入を受けて崩壊し、その後は小国が乱立する群雄割拠の時代となった。
- 10 ベニン王国は、現在のナイジェリア南部の熱帯雨林地方に13世紀頃に建設された。16世紀以降、ヨーロッパ人（とくにポルトガル人）相手の黒人奴隷貿易で繁栄したが、その後王国は衰退し、その支配域はイギリス領に組み入れられた。

【4】

解答

問1 ① マグリブ ② 7 ③ シーア ④ マラケシュ ⑤ マリ
⑥ チャド ⑦ マムルーク

問2 イブン＝バットゥータ 問3 黒人奴隷

解説

北アフリカの歴史を経済的な視点から概観した問題。設問を解くだけでなく、問題文もよく読み込んで、近世以降のヨーロッパとの経済的つながりを把握しておくといだろう。

- ① 北アフリカのモロッコ・アルジェリア・チュニジア一帯はアラブ人によってマグリブと呼ばれた。マグリブはベルベル人の居住地でもあり、彼らは次第にイスラーム化した。
- ② アフリカのイスラーム化はムハンマド没後（632）すぐに始まり、7世紀中頃にはすでにその傾向を示し始めていた。
- ③ ファーティマ朝（909～1171）はイスラーム教少数派のシーア派に属した。シーア派はその後イラン、インド、イラク、イエメンの一部の地域などで信仰され、現在では全ムスリムの約1割がこれに属している。
- ④ ムラービト朝（1056～1147）はベルベル人が西サハラに建てた王朝で、モロッコのマラケシュを首都とし、アルジェリアや地中海対岸のイベリア半島に進出した。
- ⑤ ガーナ王国（7世紀頃～1150）やソンガイ王国（1464～1591）のほか、西アフリカで栄えたイスラーム王朝にマリ王国（1240～1473）がある。
- ⑥ 9世紀頃に成立したカネム＝ボルヌー王国は、チャド湖（チャド・ニジェール・ナイジェリア・カメルーン国境に位置する）をその領土の一部に含んでいた。
- ⑦ 問題文にある1324～25年という時期から、カイロを首都にしていたマムルーク朝（1250～1517）を選ぶ。カイロはファーティマ朝が10世紀にエジプトを征服した時に建設された都市で、当初はカーヒラと称した。その後、マムルーク朝の首都としても一層繁栄し、バグダードに代わるイスラーム文化の中心地となった。

問2 チュニス出身の歴史家「イブン＝ハルドゥーン」（1332～1406）を記してある箇所が誤りで、正解はモロッコ出身の旅行家イブン＝バットゥータ（1304～68/69あるいは77）である。

問3 イスラーム商人が金とともに西アフリカで取引した商品は黒人奴隷である。彼らはヨーロッパ人が西アフリカ沿岸に到着する以前から商品として売買されていた。

【5】

解答

- 1 クシュ 2 メロエ 3 アクスム 4 マグリブ 5 ムラービト
6 ムワッヒド 7 ナスル 8 ガーナ 9 マリ 10 トンブクトゥ
11 モノモタパ 12 スワヒリ

解説

アフリカの古代王国とイスラーム化に関する問題。これまでの問題で繰り返し出てきた用語も多いので、全問正解を狙いたい。植民地化される前のアフリカ史は手薄になりやすい地域ではあるが、入試でも出題パターンは似通っているの、頻出用語を確実に押さえておこう。

- 1～3 クシュ王国は前10世紀にナイル川上流域のナバタを中心として興った最古の黒人王国である。一時はエジプトを支配したが、前7世紀にはアッシリアの侵攻によって後退し、ナイル川中部のメロエに首都を移した。製鉄技術が発達し交易で繁栄したが、後4世紀にアクスム王国によって滅ぼされた。
- 4～6 マグリブはアラビア語で「日の没する地」を意味し、モロッコ・アルジェリア・チュニジアなどを含むアフリカ北岸をさす。11世紀以降、マグリブ地方のイスラーム化が進み、1056年には西サハラに先住民のベルベル人がムラービト朝を建国した。1130年には同じくベルベル人がモロッコにムワッヒド朝を建国し、47年にムラービト朝を滅ぼして、チュニジアまでを支配した。
- 7 イベリア半島には13世紀前半にナスル朝が建国され、学芸を保護し、アルハンブラ宮殿を建築するなど西方イスラーム文化が栄えたが、キリスト教勢力に敗れて滅亡し、イベリア半島のイスラームによる支配も終焉を迎えた。
- 8～10 セネガル川・ニジェール川上流域に成立したガーナ王国は金を産出し、北方のイスラーム商人を仲介として、サハラの岩塩とギニアの金を交換するサハラ縦断貿易で繁栄したが、11世紀にムラービト朝の攻撃を受けて崩壊した。その後この地にはマンディンゴ人の王国であるマリ王国が成立し、北アフリカとの交易やメッカ巡礼の経由地として繁栄した。ニジェール川中流のトンブクトゥは、マリ王国・ソンガイ王国の経済・文化の中心地として繁栄した。
- 11 モノモタパ王国は、ジンバブエを中心にザンベジ川流域を支配し、インド洋交易で栄えた。16～17世紀にはポルトガルの圧迫を受けた。
- 12 インド洋に面したアフリカの東海岸は、10世紀頃にはインドや中国にまで達する貿易が活発に行われ、キルワ、マリンディ、モンバサなどの海港都市が発展した。ムスリム商人との交易によって文化の融合も進み、東アフリカ沿岸の住民が話すバントゥー語とアラビア語が交じり合って成立したスワヒリ語が商業用語として普及した。